

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名				
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦							
188	6	三石町	1	有形	1	現存	1	産業	5	工・鉱業	三石羊かん	本町35	大正元	1912	八木豊吉が地元小豆で銘菓三石羊かんの製造を始める。	三石町開基百年記念誌
214	6	三石町	1	有形	2	非現存	1	産業	8	その他陸運	姨布(うばふ)駅通所	山手	明治2	1872	三石会所の施設であった旅館が、明治2(1869)に幕府の請負制が廃止された際、脇本陣と改称され、明治5(1872)に駅通所とされ、小林重吉が取扱人となっていた。 三石会所が、明治9(1876)に、山手へ移転された際、駅低所もその中に移されたが、その5、姨布橋の西方に移され、明治14(1881)には池田熊蔵が、明治16(1883)には小林悦太郎が取扱人となっていた。	
189	6	三石町	1	有形	2	非現存	1	産業	9	水運・海運	万通丸、富久丸、日高丸、三石丸	—	明治3～ 明治9	1870～ 1876	海運会における活躍が目覚しかった三代目三石場所請負人小林重吉の持っていた船で、万通丸は、明治3(1870)に伊予国大洲藩より235トンの西洋型帆船(スクナー)を買い入れて手廻船としたもので、北海道において初めての私有のスクナーとなった。 また、その他の船も、払い下げを受けた常灯船を改造したり、または新造した西洋型帆船であった。	日高のれきし
190	6	三石町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	円昌寺八十八ヶ所	本桐131	大正元	1912	四国八十八箇所をまね、全程4kmの登り下り曲り等の地形は四国のものをそのまま縮小再現。仏像を安置した土は四国より運搬したもの。	三石町史、追補三石町史
191	6	三石町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	呉舞(けりまい)神社	呉舞	天保7 (創基)	1836	二代目小林重吉が漁場所の守護神として東蓬萊に建立した稲荷大明神が前身で、明治8(1875)に改称し、昭和3(1928)に現在地へ移転した。昭和57(1982)に社殿を増築する。	三石町史、追補三石町史
192	6	三石町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	三石神社	本町245	文化3? (創基)	1806?	三石町開拓者小林家の祖、三石場所請負人楢原屋平次郎(小林屋平次郎)が姨布に弁天寺を建て、市杵島比売神を祀ったのが始まりといわれる。 文政9(1826)に二代目小林重吉らが再建造營し、天保4(1833)の三石支配人仁木長兵衛とともに社殿を建立。明治8(1875)に神社制度の改革により稲荷神社と改称した。 明治33(1900)、現在地に移転改築し、昭和36(1961)、現在名に改称。昭和56(1981)の集中豪雨による裏山崩壊や、昭和57(1983)の浦河沖地震による被災のため、昭和60(1985)に再建された。	三石町史、追補三石町史、三石町開基百年記念誌
193	6	三石町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	三石山円昌寺	本桐131	明治30 (創基)	1897	真言宗東寺派 神奈川県円昌寺を移転、本堂庫裏などを建立。 昭和24(1949)に庫裏を新築したが、昭和30(1955)に本堂、庫裏全壊し、庫裏を新築した。本堂は昭和38(1963)に新築し、昭和47(1972)に八十八ヶ所堂宇を改築した。されに昭和52(1977)、53(1978)に本堂、庫裏を改築して位牌堂を新築した。	三石町史、追補三石町史
194	6	三石町	1	有形	1	現存	1	産業	11	碑・像等	高田屋嘉兵衛翁碑	三石温泉前	昭和2	1927	もともと昭和2(1927)に三石小学校前に建立されていたものを、昭和62(1987)に現在地に移設したもの。 高田屋嘉兵衛は北方交易の先駆者で、海運や漁業を成功させた人物で、三石町の開拓にゆかりが深く、かつて活躍した太平洋と誕生の地『淡路島』を望む場所に立てられた。	三石町史、追補三石町史
195	6	三石町	1	有形	1	現存	5	伝統	12	史跡等	シヨップ遺跡	旭町49.65	縄文前期	—	古くから調査された形跡があるが、本格的発掘は、昭和36(1961)、昭和62(1987)に行われ、その結果、遺構として住居跡、落とし穴、柱状ピットなど、遺物として土器、石器などが出土した。 標高30m、丘陵端部約5万㎡が遺物包含地となっており、このような大規模な遺跡は全道木に非常にまれで、石鍾の出土量も非常に多く、さらに出土した土器には網状の捺土が混入するなど興味深いものとなっている。	追補三石町史
196	6	三石町	1	有形	1	現存	5	伝統	12	史跡等	旭町1遺跡	旭町84	縄縄文	—	三石川右岸段丘100㎡が遺物包含地となっており、昭和56(1981)に発掘調査が行われ、住居跡、円形土壇、Tピット、獣骨、大狩部式土器、石器などが発見された。発掘された土器、石器などは郷土館に展示されている。	三石町史、追補三石町史
197	6	三石町	1	有形	1	現存	5	伝統	12	史跡等	シヨップチャシ	旭町96	—	—	先丘式舌状12m×10m丈のチャシで、幅約3m、深さ約1mの濠がある。	三石町史、追補三石町史
198	6	三石町	1	有形	2	非現存	4	教育	13	学校	海員学校		明治9	1876	三代目小林重吉が、三石会所の二階ではじめた日本で最初の海員学校。その後函館に移し、現在の函館商船学校となる。	三石町開基百年記念誌
199	6	三石町	1	有形	2	非現存	1	産業	15	人物	小林重吉(三代目)	—	文政8～ 明治36	1825～ 1903	初代楢原屋平次郎は、文政元(1818)に三石場所請負を許され、三石町における和入定着による漁業の初めとなった。 平次郎は松前福山に帰って隠居するため、文政6(1823)に甥の重吉が2代目となって三石場所を請け負った。 2代目は屋号を小林屋に改称し、養蚕所、駅運の設置等を行ったが、天保4(1833)に亡くなり、その長男庄五郎が9歳で家督を相続して三代目となった。 三代目重吉は、三石町の開拓といわれ場所廃止後も漁場持を命ぜられ、明治9(1876)には、洋帆船万通丸を手廻船にして就航させ、日本で2番目の海員学校を創始したり、また、明治10(1877)には漁具、魚網改良の製材所を開いたりした。中国への昆布輸出の基礎をつくり、三石昆布を全国的に有名にした。	三石町開基百年記念誌、日高のれきし、北海道歴史人物辞典
200	6	三石町	1	有形	2	非現存	1	産業	15	人物	梶村運八	梶毛 (福畑)	明治元 ～?	1868～?	知比恵多通喜の5男として生まれ、明治27(1894)に分家した後、知人に見習いながら農業を営む傍ら昆布採取を業として生計を立てていた。 大正7(1918)に札幌市で開催された「開道50周年記念博覧会」に長切昆布を出品し、きわめて優秀と認められて入賞、宮内省にも賞上げられた。 三石の昆布は、もともとアイヌの人々が採取していたが、和人が移住して特に清国貿易が行われるようになると競って粗製乱造の昆布を輸出したので信用を失い、不振を極めていたが、その「三石昆布」の名声を盛り返し、全国的に有名にし、価格安定の動機付けとなった。	三石町開基百年記念誌、三石町史
201	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	16	民話・伝説等	布辻の伝説	布辻川	—	—	静内と三石の境にある布辻川はプシュナイといい、他の川より早く凍結して、ものすごい音をたてて氷が裂けるのでプシュ(破裂)するナイ(川)といわれるが、河童がすんでいて出るときプシュという妙な音を出すのでプシュナイになったという説もある。	三石町史
202	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	16	民話・伝説等	蓬萊山の白蛇伝説	蓬萊山	—	—	ある法師がえりも岬を目指していたところ、女蓬萊山の頂上に巨大な白蛇の姿を発見した。 この白蛇が対岸にそびえる山に向かって投げ縄のように延びていき、「われはあの山の神である。望みをかなえるので一緒に参ろう。」と話しかけてきた。請われるまま蛇に乗ると山の上に登り、白竜大権現と書いたお札を残した。 下山しようとしていたが断崖絶壁で降りることができないといわれはこの山を7周半巻いているのでもう一度われに乗りなさい。」と白蛇にいわれたので、そのようにして無事下山した。	北の生活文化9まつりと民俗芸能

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名				
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦							
203	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	16	民話・伝説等	蓬莱山	東蓬莱296	—	—	三石町を流れる三石川の upstream 約3kmに位置する奇岩怪石の山で、「三石川を遡った怪物がアイヌの人—に殺されたあとに化石となったものといわれる」などアイヌ民族に関する数—の伝説が残っている。アイヌ民族は、三石川をはさんで対置する2つの山を男蓬莱山、女蓬莱山と呼び、男女2つの山を鯨の頭と尾になぞらえて信仰してきたが、その後和人が入り、様—な神を祀るようになった。鯨は竜神と同じものとされて稲荷とともに三石の漁師たちの間に広く信仰されていたものである。昭和51(1976)、三石町指定文化財となる。	史跡と名勝、三石町史、追補三石町史、新諸国物語わがまち再発見北海道212文化編、北の生活文庫9まつりと民俗芸能
204	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	淡路踊り	延出地区	明治38	1905	淡路からの入植者によって伝えられ、豊穡を願うもので、手踊り、笠踊り、カッカ踊り、榊踊りの4つがある。民謡「五尺節」にあわせて踊られる。昭和45(1970)に延出郷土芸能保存会が結成された。	三石町史、追補三石町史、三石町開基百年記念誌
205	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	越前踊り	歌笛・川上地区	明治23	1890	福井県からの入植者によって、開拓の苦難の中で故郷をしのんで踊られた。音頭とりの口説き歌によって踊られ、5つのテンポの異なる踊りで構成される。せわしく、動きの激しいのが特徴で、俗に「ちやがちやが踊り」といわれる。現在、福井県ではほとんど見られなくなったといわれる。昭和40(1965)、歌笛越前踊り保存会が結成される。	三石町史、追補三石町史、三石町開基百年記念誌、新諸国物語わがまち再発見北海道212文化編
206	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	南部盆踊り	富沢地区	明治25	1892	岩手県からの入植者に伝えられ、年貢を納められない農民が代わりに労役をしたが、その苦しみの憂さ晴らしに踊られたのが始まりといわれる。昭和45(1970)に延出郷土芸能保存会が結成される。	三石町史、追補三石町史、三石町開基百年記念誌
207	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	豊年樹踊り	延出地区	明治18	1885	兵庫県淡路島の農民が蒔き付けから収穫までの米作りの姿を、地元の民謡である「五尺節」に合わせて振付けた踊りといわれている。淡路島から入植者により伝わり、延出の秋祭りで踊られる。	新諸国物語わがまち再発見北海道212文化編
208	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	三石獅子舞	—	昭和12	1937	始めは三石町の開祖小林屋の時代に南部津軽方面からの漁夫たちによって出身地の各方式で舞われていた。大正8、9(1919、1920)頃は、新潟県佐渡地方の獅子舞を行っていたが、毎年行われる状態ではなかった。昭和12(1937)に水産青年団が新潟県能生町の獅子舞を取り入れて復活させた。昭和45(1970)には獅子舞保存会が結成され、今日まで継承されている。	三石町史、追補三石町史、三石町開基百年記念誌
209	6	三石町	2	無形	1	現存	5	伝統	17	祭事・芸能	三石民族文化保存会	—	—	—	昭和59(1984)に国の重要無形民族文化財に指定された「アイヌ古式舞踊」の保存団体として、平成6(1994)に指定され、その伝承を行っている。	浦河町立郷土博物館資料
210	6	三石町	1	有形	1	現存	2	宗教	18	工芸・美術	三石神社の献額	本町245	—	—	三石神社に奉納された額で、文政6(1823)のものは、和人とアイヌの人—が共同で漁獲している画となっており、珍しい物とされている。また、慶応3(1867)のものにも、和人とアイヌの人—の姿が描かれている。	三石町史
211	6	三石町	1	有形	1	現存	3	生活	99	その他	船場家のイテイ	越海町111	明治25	1892	川崎舟「南越丸」の船頭船場三太が家屋を建てた際に、移植したイテイの木。昭和61(1986)に三石町指定文化財となる。船場宅は、切妻、南京下見、桁葺きで、柱などは柱が使われ、明治39(1906)に長男勇蔵に相続され、内部の一部が改造されたが、昭和46(1971)ころまでは、大方昔のまま残っていた。	三石町史、追補三石町史
212	6	三石町	1	有形	1	現存	4	教育	99	その他	郷土館図書館	本町212	昭和50	1975	三石町開基100年記念事業の一環として開拓の歴史を永く保存するとともに、資料をとおして郷土の理解を深める場として図書館と同時に建設された。農林水産業、生活に関する道具のほか、遺跡から発掘した縄文土器や石器などを公開。	追補三石町史
213	6	三石町	1	有形	2	非現存	1	産業	99	その他	三石会所	本町	寛政11	1799	三石場所が寛政11(1799)に幕府の直領となった際、それ以前の運上屋を三石会所としたもの。文化6(1809)の文献では、運上屋時代からある横行11間、梁間4軒の建物に、享和3(1803)に座敷を増築した会所と、旅宿、厩舎、板蔵、渡船、漁船などがあつたと記録されている。	三石町開基百年記念誌、三石町史
215	6	三石町	2	無形	2	非現存	1	産業	99	その他	三石場所	三石郡一帯	不明	不明	場所制度とは、蝦夷地では米作がなく石高制をもって家臣の給料を定めることができなかったので、松前藩が交易その他による収益を見込んで各地を場所と区分し、これを知行として家臣に配分する方法で、当初「オムシャ」といわれる方法でアイヌの人—と交易を行っていたが、その後、場所請負制がとられ、請負人や支配人によって運営されるようになったが、アイヌの人—を酷使し、また、不当な交易をすることが多かつたといわれる。三石場所は、天明6(1786)の蝦夷地遣集の中に登場しており、その頃、知行主は直領で、戸数30余り、人口140余りとなっていた。寛政元(1789)には、知行主杉村多内の支配下にあつて、阿部屋伝七が場所請負人として経営していた。寛政11(1799)には、外国からの蝦夷地守備のため幕府直轄となったが、文化10(1813)には再び請負制が復活し、函館の若狭屋庄兵衛が落ち、文政2(1819)には榎原屋半次郎が請負い、文政6(1823)には半次郎の甥である小林重吉が、天保4(1833)には重吉の長男庄五郎が重吉をついで場所請負人となった。その後、明治2(1869)に請負人制度が廃止されたが、小林重吉は政府から漁場持を命ぜられている。	三石町開基百年記念誌、三石町史